利益の半分をとり、宝井の上の全部の人が利益の半分をとる。宝井におりる人は長い縄を腰につけ、腰に二個の袋をつけ、井戸底で宝石をひろって袋に入れる。また腰帯には巨鈴をつけて、宝気にまかれて動けなくなったら鈴をならす。その音で宝井の上の人達が縄をひいて、ひっぱりあげる、そうすれば、その人は無事である。しかし昏睡していれば、その時は白湯だけ飲ませて、三日間は食物を与えない。それから養生して平復するという。

この記事からはいまの酸素欠乏症を思い出すのである。

（労働科学研究所）

『黄帝内経太素経』における経穴の主治症について

高島文一

はじめに

『黄帝内経太素経』は、『旧唐書』経籍志にはじめて記載されたが宋以後は亡佚した。一八二〇年仁和寺に丹波頼基に依る写本が存在することが発見された。唐初の揚上善が、『素問』『霊枢』を類別編纂し注釈をほどこしたとされている。

一方、仁和寺には、揚上善撰の『黄帝内経明堂』の序文と巻一が存在している。この序文に「太素はその宗旨を陳べ、明堂はその形見を表わす」と述べている。『太素経』には主治穴の記載は少く理論が主であるが、その理論的な記載の中に選穴の要点が示されることがあるので、『太素経』の中の経穴名の出てくるところを選り出して、その内容を検討した。

一　身体部位を示す経穴名

㈠巻九、十五　絡脈には経脈の流れを述べ、列缺、通里、内関、支正、偏歴、外関、開陽光明、公孫、大鐘、蠡溝、長強、鳩尾、大包の名が出てくる。㈡巻十　経脈標本には、命門者目也と命門の名が出てくる。㈢巻十　経脈根結には、大陽根干至陰、結干命門等の記載がある。㈣巻十一本輸には、肺出少商…為井等の記載がある。㈤巻十三　経筋には缺盆の名が出る。㈥巻二十六　寒熱雑説には、頭部の人迎、扶突、天牖、天柱の位置を、癰疽の治りにくい部位として伏見を述べている。㈦巻二十七　邪論には、人之涎下者…廉泉開…と廉泉の部位を示している。㈧巻二十七邪客には関元之間…と関元の部位を示している。㈨巻二十九　脹論には、廉泉、玉英者津液之道也と部位を示している。㈩巻三十　頷痛には按人迎於経…と人迎の部位を示している。

二　主治穴を示す経穴名

㈠巻十一　府病合輸には巨虚上廉が痛みのある大腸病の主治穴と書かれている。㈡巻十一　気穴には、大抒、欠盆が胸中の熱を寫する主治穴と書かれている。㈢巻十一　骨空には、風府が頸項痛の主治穴と書かれている。㈣巻十二　營衛気行には、三里が腸胃の、天柱、大抒が頭の気の乱れの主治穴と書かれている。㈤巻二十三　量繆刺には然谷が積を予防する穴と書かれている。㈥巻二十三　雑刺には、三里が骭脹および便秘、胃の逆気を下す欧胆の主治穴であり、気海巨虚上廉、三里が腹中常鳴に効果あり、巨虚下廉が、厥逆上衝腸胃に効果ありと述べている。㈦巻二十四　虚実色寫では、然谷は寫に、復溜は補に働くと述べている。㈧巻二十五　熱病説には出汗させる穴として、魚際大泉（大淵）大都、太白を述べている。㈨巻二十五　十二瘧には変法刺として、一刺廉泉、二刺委中、三刺大抒、譫譫と述べている。㈩巻二十六　厥頭痛には天柱を、厥心痛には、腎心痛に京骨、崑崙、脾心痛に然谷、太谿、肝心痛に行間、大衝、肺心痛に魚際、太泉を主治穴としている。

㈠巻二十六　寒熱雑説には、関元は体解の主治穴であり、人迎、扶突、天牖、天柱、天府を五部の大輸と称し頸項部の病に効果ありと述べている。大迎は下歯齵、角孫、出眉外（上関）は上歯齵、懸顱は視力障害に、大椎は眼と頭の

痛みに効果ありと述べている。㈢巻二十六　灸寒熱法には、大椎、関元は寒熱の主治穴と述べている。㈢巻二十七、十二邪には、眉本（攢竹）は噫に、眉本、通谷（太陽の營）は噫に、天柱は視力の弱った時の、客主人は耳鳴に効果ありと述べている。㈣巻二十九　脹論には三里は脹に動くと述べており、㈤巻三十　雑病には、飛陽は腰痛に、犢鼻は膝痛に、曲泉は病洩、癃、下血に、湧泉は如蟲如姐病に、大抒は癲疾の筋攣急に、曲泉はさらに新発した狂に、三里は風痙（手足のひきつり）に、気街（気衝）は腹痛に効果ありと述べている。

まとめ

太素経の中に出てくる経穴は、上肢、下肢のものが多い。働きの上からいうと、上肢では魚際、大泉が寒熱に、下肢では大都、太白が寒熱に、三里が肝脹、便秘、欧胆、腹中常鳴、風痙に、巨虚上廉が腹中常鳴に、巨虚下廉が厥逆上衝腸胃に、曲泉が病洩、癃、下血に、然谷が積の予防、実の瀉に、湧泉が如蟲如姐病に、気街は腹痛に、飛陽は腰痛に、犢鼻は膝痛に、面部では眉本（攢竹）が噫、噫に、客主人が耳鳴に、懸顱は視力障害に、大迎は下歯齲に、角孫、出眉外は上歯齲に、背部では天柱が頭の乱れ、厥頭痛に、大抒が頭の気の乱れ、癲疾の筋攣急に、胸中の熱を寫するに瘧の変法刺に、腹部では関元が体解、寒熱に用いられている。経穴名としては四十六穴が出てくる。これで大体の傾向をつかむことができるが、経脈の名をあげて治療部位を経絡的に述べているところが多い。

（京都大学人文科学研究所）